

名残

藤井颯太郎

劇作家 演出家 俳優

1995年生まれ。兵庫県立宝塚北高校 演劇科在学中。幻灯劇場を旗揚げ、18歳の時に書いた戯曲「ミルユメコロオでせんだい短編戯曲賞を最年少受賞。近年は、架空のホテルに宿泊しながら観劇する「泊まれる演劇」シリーズの演出を手掛けたり、NHK連続テレビ小説「おちよん」に出演したり、ABCテレビ「THE GREATST SHOW NEW」でAえーグループとコラボし音楽劇を発表するなど、多方面で頑張っている。

わたしはどこまでもトマソンを愛している。原っぱに残された鉄の扉、レンガ壁にめり込む階段、誰が出入りするの二階外壁につくられたドア。生まれた役目を終えてもなお、そこに置き去りにされてしまった無用の建築物たち。それらを「トマソン」と呼ぶ。トマソンの素晴らしさはなんと言っても、なんの役にも立たないことにある。

今の部屋へ越してきたのも、窓から見えるトマソンが気に入ったからだ。家の向かいには、ポツンと取り残された白い螺旋階段が一つ、空に向かって自立している。高さは十メートル程だろうか。雨の日になると、鋼鉄の螺旋階段に雨粒がぶつかって、踏み板や手すりが豊かな音を鳴らします。その姿は、巨大な楽器のようにも見えた。

その日も朝から雨が降っていた。いつものように窓際にソファアを引っ張ってきて、寝癖もおさず螺旋を眺めていると、男が一人、雨を避けて螺旋階段の下へ駆け込んできた。上着についた水滴を手で払い、フードを脱ぐ。横顔が見えた。マキ君だった。わたしが窓を開け声をかけると、マキ君は驚いたあと、満面の笑みを浮かべ大袈裟なくらい手を振った。大袈裟なくらい手を振って、抱えていたカバンを水たまりに落としました。

ナゴミとマキ君に出会ったのは十八歳の頃だった。その頃のわたしは「なにか、誰かの役に立たなければ」という漠然とした焦燥感に駆られていた。わかりやすく誰かの役に立ちたくて、大学のボランティアサークルへ入ってみたりもした。だが環境問題や教育格差の問題などに関心のある先輩たちと話すうち、「なにか、誰かの役に立ちたい」なんていう自分の動機は、なんて曖昧で不純なんだろうと悲しくなった。

「あんまり役に立たないかもねえ、あたしたち」
交流会を兼ねたゴミ拾いの最中、同級生の女の子が話しかけてきた。みんなと少し距離を置いたわたしを気遣ってくれたのかもしれない。「さっき面白いもの見つけたんだよね」彼女のあとをついていくと、ゴミ袋を持った男の子が大きな歩道橋を見上げ、突っ立っていた。ただの歩道橋じゃない。階段のついていない、登れない歩道橋だ。街中に突然現れた巨大な非日常。訳が分からなくて、興奮した。これがトマソンとの出会いだった。そしてこの時出会った二人が、ナゴミとマキ君だった。

私たち三人はボランティアサークルを辞め「トマソン部」をつくった。はじめのうちはネットで得た情報を頼りに、全国各地、あらゆる場所へトマソンを見に行った。
「金メダルだわ、これ」まだ誰も知らないトマソンを発見すると、興奮しながらナゴミはそう呟いた。トマソンを発見した感動は、オリンピック選手が金メダルを獲得した時の感動にも匹敵するというのが彼女の持論だった。その日以来私たちは、最高のトマソンを見つけた度「金メダル！金メダル！」とはしゃぐようになった。私たち三人は四年間、沢山の金メダルを集めてまわった。

「あの螺旋階段、登ってみたいなあ」窓際のソファアに身体を預けながらマキ君が言う。彼の服を乾燥機に投げ入れ、しおしおになった彼の手帳にドライヤーを当ててやる。最近は大手の不動産屋で働いているらしく、内見や外回りついでにトマソンを探すのが、彼にとって最高に楽しいサボり方なのだ。彼と会うのは四年ぶりだった。ナゴミのお通夜で顔を合わせたのが最後で、そういえばあの夜も、葬儀場のそばにあった鉄塔を見上げながら「登れるな、これ」と呟いていた。

「来月には解体するんだって。それまでに、この部屋も引っ越そうと思って」コーヒーを手渡すと、マキ君はカップに口をつけながらじつくり部屋を見渡した。「一人で住むにはちょっと広いし、あと家賃もね」不動産屋はしばらく黙った後、小さく頷きながらコーヒーを一口飲み込んだ。二人は外を眺めながら、螺旋階段が響かす音をしばらく聴き続けた。静かな二人の時間を破って乾燥機の甲高いアラームが鳴った。ドラムはゆっくりと回る速度を落とすはじめ、やがて動かなくなった。

まだホカホカの服を押し付けて、彼を玄関まで見送る。マキ君は少し言葉を選んでから「あの螺旋階段。解体される前に一緒に登ろうよ」と言い出した。わたしは、いやだよ危ないし、とだけ言って、小さく手を振り玄関の扉を閉めた。また一人になった部屋で空になったコーヒーカップを片付け、机やソファアを軽く整える。ふと、マキ君が座っていたソファアに触れ、恐る恐る座ってみる。いつもわたしが座っている左側に比べると中のバネがヘタっておらず、お尻や背中を力強く支えてくれるような気がした。

突然、外から鋼鉄の階段を駆け上がる音が聞こえてきた。ずぶ濡れのマキ君が太ももを振り上げ、螺旋階段を駆け上がっていくのが見えた。水に足を取られ転げそうになりながらも、リズムカルに登っていく。少し失速したのち無事最上段へ辿り着くと、呼吸を整え、こちらに向かって大袈裟に手を振り出した。

「ねえ！これ、金メダルだよ？金メダル！」

わたしは返事もせず窓を閉め、お風呂に熱めのお湯をはり、玄関にバスタオルを二枚並べて置く。髪を結び、滑りづらいスニーカーを履くと、傘も持たず外へと駆け出した。

